
落日の音

もいもい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落日の音

【Nコード】

N8061V

【作者名】

もいもい

【あらすじ】

とおい音。

輝き あこがれ かなしみ。

諦めていれば、なにかかわっていたらどうか
国を失った姫が、見出だす思いとは。

？

タイトルは、『落日の音』と読んでください。

序

争乱の音が遠くにきこえる。

なにかが燃える音も。

でもとおい。

ずっととおい。

うつすらと目をあける。

霞む天井。亀裂の入った壁。倒れた椅子。散らばった硝子。砂だらけの床。抜き身の短剣。

ゆっくりと身を起こす。

髪や頬についた砂が、パラパラと零れた。

ゆるゆると短剣に手を伸ばす。力が入らずに、また床に崩れた。

とっさに腹をかばった。腹に片手をあて、ずるずると這いつくばって進む。

長い衣が無惨にも破ける。

わたしは なにが したいのだろう

息が上がる。

夢中で手を伸ばす。

勢いのままに剣の柄を掴んだ、そのとき

「なにをしている」

矢を射るような鋭い声が、響いた。

一・

あたたかい……。

だれか、手を握ってくれているの？

ああ、そうか。

かえってきてくれたのね。

また、あそぼう。

幼いあの頃のように

「……キールド」

「お目覚めでございますか」

はっとして瞬いた。

目に映るのは、穏やかそうな初老の男。少しの笑みを湛えて、わたしを見下ろしている。

「ご気分はいかがでございますか」
なだめるような声だった。

「すこし……だるい……」

先ほど覚醒したはずなのに、応えは存外頼りないものだった。
いら

「左様でございますか。どこかお痛みはございますか」

いいえ、と応えるかわりにふるふると首をふった。

「脈はご安定なさっております。長の行程のお疲れかと存じます。今少しお休みになられれば、すぐにもご回復あそばされましょう」

「……脈？」

ならば、先ほどの温もりはこのかたのものだったのね。ぼんやりとそう思っていたのを、穏やかな声が遮った。

「恐れながら、先ほど御身をお清めさせていただきました。……何事も、どうかご案じ召されませぬよう」

……何事も……？

その刹那、今度こそ鮮烈に目覚めた。

「……っつー!!」

勢いよく起き上がろうとして、ひどく焦った様子の声に止められた。

「なりませぬ！ 突然にこのようなことを申し上げて、お許しください。ですが、どうかお心安らかに。なんのご心配も要りませぬ」

そんな……。

そんなこと……。

ひゅう、と喉が鳴る。

くるしい。

胸が、くるしい。

ああ、そうか。

助かったのだ、わたしは。
助かって、しまったのだ

。

やわらかい笑顔のひとつだった。春の陽のように。

*** ** *

目覚めて二日経った。

こちらに来るまでの二日間も、わたしはずっと眠り続けていたらしい。

気がつけば見知らぬ土地の城で、見知らぬ者たちに囲まれていた。

肌掛けを纏って、緩やかに庭園に向かって歩を進める。陽が落ちる頃に戻れば良いだろう。それまではまだ幾分か暖かいから。

ぱし、ぱしと、踏むたびに乾いた音の鳴る落ち葉を見つめた。祖国
いや、故国でも 幼い頃、季節になると落ち葉を踏んで毎年
遊んだ。いつの頃からか、それはしなくなっただけだ。それでも、
いつも傍らにいてくれたひとを思いながら季節を眺めた。

いつしか無心で落ち葉を鳴らしていた。
ひゅー、と風が鳴る。

落ち葉がからからと舞う。肌掛けが重たそうにさらわれた。

「あつ」

指の間を風が通り抜ける。

落ち葉が、舞う。

からから

からから

風が鳴る。

足下の葉も、すべてさらって。

落ち葉は舞う。

ゆっくりとだれかが肌掛けを拾う。

思い出は、とまってくれるだろうか。

そこに佇むひとが、あなたであつたならば。

三・

「なにをしている」

乾いた声が響いた。

あのとときと、同じだ。

氷の刃のように。

けれど滾る炎のように。

ひどく、乾く。

「陛下」

礼をとろうと膝を屈めようとしたが、思いがけなくそれは制された。

ふわりとやわらかいものが肩を覆った。先ほど落とした肌掛けだった。

「よい。身体に障る」

「……恐縮にございます」

「それよりもなにをしていた」

落ち葉を

踏んでいたと、言えばどう返されるだろうか。

子どものように無心になって。

なんと言っただろう。
わたしを、わたしを……

「わたしを憎んでいるか」
真冬の夜空のような瞳が、わたしを捉えた。

あのひとは、正反対だ。春の陽のような、あのひとは。

はらり、と葉が落ちる。

「愚かなのは、わたしです」

また、葉が落ちた。

三・（後書き）

構成上、もうしばらく一話一話を短く掲載する予定です。申し訳ありません。

また、モノローグの描写ももう少し続きます。

四・

これ以上は身体が冷えると言われ、横抱きにされて室に向かった。肌に触れた刹那に、ほんのわずかに感じたような疑問は、けれどそれと認識する間もなく霧散した。

遠ざかる庭園から城の北側の窓に見える湖に、ぼんやりと目を移した。西日に湖畔の木々が照らされ、水面に濃い晩秋の影を落としていた。国境とはいえ、故国から二日移動しただけとは思えぬほど、目にした土地は開けた眺めだった。長きに渡って戦争の絶えなかった故国の王城は、遙か眼下に城下を望んだものであったのに。

湖を城のこれほど間近に見ることができると、驚いた。地平はどこまでも穏やかであるように感じられた。

「今少し、ひと月ほどこちらで過ごす。雪が降りはじめたならこちらからは離れる」

唐突に頭上から声が降った。

「……こちらからは、もう城は見えないのですね」

声には答えず、窓を見つめたまま呟いた。

ついこの間まで国の境界であった湖の奥の深い森は、多くを遮る。

故国の城も、熱も、温もりも、光も。

「案ずることはない」

いつの間にか歩みを止めていた声のほうを、今度は顔を上げて見つめた。

気休めなのだろうか。わたしに構うことなどないのに。それに、なぜわたしに……

「お方様」

若い女の声がした。それが室付きの侍女で、なおかつわたしを呼んでいるのだと気づくまでにわずかに間を要した。

「侍医がお室に参っております」

そういえば、あの穏やかな声のひとわたし身を案じていた。思わず顔がゆがむ。

なにを心配することがあるというのだろう。

「心配事など、なにもありません」

だつてわたしが恐ろしいことは、この国にはないのだから。

五・

ラヴェンナ、ぼくはもう吹かないよ。
かなしみの笛しか、吹かない。

*** **

「きいんどおー こつち、こつちだよお」

「あはは、ラヴェンナ。それだとすぐにつかまえられるよ」

「ぜえったい、だいじょうぶ。だってちゃんと、れんしゅうしたものの」

「えっれんしゅう？ 追いかけてこの？」

「そうよ。おとうさまに、てつだっていたいたいの」

「『おとうさまに』って……。あはは、よくやるね、ラヴェンナ。

「一国の王をつかまえてさ」

「おとうさまは、わたしをつかまえられなかったわ。だから、きーるどにも、ぜったいにむり」

「うーん、きみの『おとうさま』は、お姫さまにはとってもよわいからなあ……」

「いいからっ。はやく、そこにたつて。わたしが、いいっていうまで、うごいちゃだめだからねっ」

「……ほら。つかまえた」

「ああつ！ ずっーい。ずるいわ、きーるどっー！」

「あはは、ごめんラヴェンナ……って、うわあ！ ご、ごめん。ごめんよ。あやまるから、なかないでよ」

「ゆ、ゆるしてあげないわっ。ふ、ふえをふいてくれるまで、ゆるしてあげないっ！」

「じゃあ、笛をふくから、なみだをとめてね」

きーるど のね、ふえのおと、だいすき

とつても きれい

とつても あたたかい

あしたも、あそぼう

また、あしたも

ふえをふいてね
ずっとずっと

六・

わたしの過ぐす室にはいくつかのリボン刺繍がされた装飾品や小物が置いてあった。ほかに、久しく目にしていない綺羅な宝飾や調度品がしつらえてあり、南に面した室の窓からの日差しにまぶしく映されている。

近くにある宝飾箱のひとつを、手にとった。質感をたしかめるように、ゆっくりとリボンによって刺繍された撫子の花をなぞった。晩秋にあつてめずらしい日和に、撫子の薄紅が淡く光る。

思わず、といったほうがよいだろうか。思わず、ふれてしまった。もう随分と刺繍などしていない。秋のちいさな輝きを体現したようなあたたかな色合いに、人知れず顔がほころんだ。

むかしは、刺繍をよくしたものだ。母に教わりながら、ただどしい手つきで。それほど得手ではなかったから、刺繍をしているときは、『むずかしいお顔をなさっているわよ』と、そのたびに微笑を返された。それでも、よく刺繍をした。上達して、見てほしいと思うひとが、いたから。

髪を結ぶためのリボンにも、刺繍をしたことがあった。とても上手くできて、気に入って使っていたけれどすぐに失くしてしまった。

予兆だったのだろうか。
わかっていたのだろうか。

リボンを失くしたことに気づいたとき、城は、一度目の、狂気の血に染まった。

「もうすぐだ」

声が、怜悧に空気を裂いた。

乾く

ひどく

なにが？

そのひとが手にしていたのは、笛だった。

あなたが、奏でた。

七・

たすけるから 君を かならず

*** ** *

「キールド、お城を出ていくつて、ほんとう?。」

「うん。十八になれば、だけどね。少しの間、遊学しようかと思っているんだ」

「そうなの? ……さみしくなるなあ……。でもっ、あと三年は、こちらにいるのよね?。」

「そうだね。たくさん勉強して、すぐにかえってくるよ」

「……ゆうがく、しなきゃ、お勉強はできないの?。」

「そういうわけではないよ。ただ、この国は、ずっと戦争をしてきたから」

「せんそう……」

「きつと、今が特別なだけなんだ。これからは、なにが起こるかわからない。だから、勉強しに行くんだ。いろんなことを、見てくるんだ。この国が、ずっと平和であるように」

「そうなの……」

「……ラヴェンナ、そのリボン、素敵だね」

「ほんとう!? これね、とても上手につくれたの。今までで、きつと、いちばん。………わっ、きゃあっ!! すごい風っ。いたっ、いたい。落ち葉があたって、いたい」

「……ラヴェンナ、きみ。……あは、あははは。頭と顔に、落ち葉が、あははっ」

「えっ？ な、なあに。そ、そんなに笑うことないじゃない」

「ご、ごめん。でも、きみが踏んで遊んでいた落ち葉たちの仕返しじゃないのかな。細かくなつたのが、顔について……あはは」

「そ、そういうキールドだって、落ち葉まみれだわっ」

「じゃあ、おそろいだね」

「やだあ、なあに、それ」

諦めていればよかった

願わずにいれば

そうしていたならば、わたしたちは、なにか、かわっていた？

ねえ？

キールド

八・

「……吹けない」

懷にしまっていた笛から唇をはなし、息をはいた。

笛の音がでないことに、知らずわずかに安堵しながら。

「こちらにおられたのですか」

落ち葉を踏む乾いた音と、すでに聞きなれた侍医の、穏やかな声に振り向いた。

「ごめんなさい、もうそんな時間だったのね」

音をだすことに夢中になっていたらしい。石畳にはすっかり茜色が差していた。

「……キールド様のお笛でございますか」

問われた、にわかには信じがたい言葉に、息をのんだ。

「なぜ、それを」

「わたしも、七年前の政変を逃れて参りました」

枯れ葉が、音もなく地に、触れた。

「ときは、次々とわたしを、わたしたちを翻弄します」
そう言って、穏やかな声を老いた手に落とした。

「後悔を置き去りにしてなお、償いすら、赦されることはかなわず」
入り日はなお濃く、木々の枝に色を落とす。

ラヴェンナ、ぼくはもう

「……喪われたかたもまた、そうだったのではありませんか」

吹かないよ。かなしみの笛しか

胸元の笛を、強く、にぎる。

胸が、くるしい。

赦されないというのなら、わたしのほうだ。

愚かであったのは、わたしだ。

「……なぜ。なぜですか。わたしをそれほどまでに、心配なせるのは」

あのひとも。

「わたしが」

*** **

「なぜ、なぜっ……！　このようなものを、わたしに
突如として、視界が真っ赤に明滅する。
顔をおおう。

息をつめる。

涯^{はて}のない、静けさに言葉をうしなう。

かなしみは、そそいでなお、戯れに零れ落ちる。

音は、いたみに沈む。

熱は、甘露に染まる。

「望んだのは、そなただけではないからだ」

ちがう。愚かな望みかたをしたのは、わたしだ。

「こわしたのは、わたしです」

あの輝きを、あこがれを
ぬくもりを、光を

熱に、染まってしまったから。

「わたしが」

これ以上は言葉をのんだ。

事実を言ってしまったてはもう、戻ることはできない気がするから。

恐ろしいことなど、ない。

恐れていることは、ここにはない。

だって音はもう、きこえない。

とおく思い出の、あの日から。

九・

春の暁 夏の木漏れ日 秋の落陽 冬の星影

*** ** *

遙か切り立つ山肌に、河を吸い上げ、岩を浚い、石壁を叩く風を
巻き込み、最上の塔の旗は揺れる。砂塵は足下を哄笑するかのよう
に歩廊を流れた。

手にしていたはずの手紙を、風はいよいよ居丈高に嗤い、うばっ
た。

「まってー!!」

堅牢な壁に、風は冷たく反射する。舞いあがっては、とまり。舞い
あがっては、とまる、先ほどまで手の内にあつた手紙を追いかけた。
手蹟に残されたぬくもりを求めるように、手を仰ぐ。

ザ

ザアアアア

迷乱する落ち葉が、眼前に迫った。
朽ちた庭園にあってなお、落葉は木霊した。

「ラヴェンナ」

「……………」

「どうして」

「戻ってきたんだ。君を、たすけるために」

「わたし、手紙を、なくしてしまった」

「持っていてくれたのか」

「ラヴェンナ。泣かないで」

「ラヴェンナ」

「すまない、ぼくはまだ。かなしみの笛しか、吹けない」

「ラヴェンナ。たすけるから。君を、かならず」

大切なものは、あのとくに失ってしまった。
気に入っていたリボンも、父も母も、祖国も。

ただひとつをのぞいては。

たったひとつのあこがれ。
たったひとつの光。

「お方様。お手がとまっておいでです」
わたしを呼ぶ室付きの若い侍女の声に、手もとに目を戻した。
布を刺したままの針は、その中ほどでとまっていた。

「お上手でいらっしゃるんですね」
わたしの手もとの刺繍を見つめて、侍女は言った。

「そんなことはないわ、だって随分と久しぶりなもの」
ただ、この花の刺繍に関しては、慣れているというだけだ。
「……それまでで、いちばん上手くできたのはね、撫子の花だったの」

あたたかな輝きは、あのひとのようだった。
春の陽のようにやわらかで。
山花のように、ただ静かに。

だから、すきだった。花も、笑顔も。
萌えいずるみのりの、きらめきをあらわしているかのよう。
やさしい夕日に、つつまれているかのよう。

「だけど、なくしてしまった」

それは、いつ？

「一度ならず、二度までも。こんなことにつ……」

「お方様。笛が……」

膝においていた笛が、いつの間にか床に転がっていた。

侍女の手が、笛を拾いあげた。

「この笛をお持ちだった御方は」
侍女の手が、笛をにぎる。

ラヴェンナ

ぼくは、ゆるさない。

君からすべてをうばった

ぼくの父を。

十・

身体を刺すような風が、あたたかかったものの名残すら、うばい去る。

ただ轟々と音は流れ、数瞬まえの輝きをまた、連れてゆく。恐れを知らぬ弔鐘だけが、惨禍の嘆きをなでていった。

「……キールド」

音が、きこえる。

あなたの、音が。

でもとおい。

ずっととおい。

かなしみの音は、いつ、かえるの
おさなき音色に、いつ、かえるの

*** ** *

くずれ落ちた景色に、立ち尽くした姿が滲んで、映った。

「ラヴェンナ、ぼくはもう吹かないよ。かなしみの笛しか、吹かない」

痛みに沈んだ瞳は、伏せられた。

「鎮魂の笛を、奏でよう。祖国を、取り戻すまでは」

「……とりもどす……？」

「ぼくには、それしか赦されない。いや、それすらも、きっと。けれど」

「わからない。キールド、わからない。どうして？」

「ラヴェンナ。泣かないで」

ひどく冷たい手が、頬をすべった。

ぬくもりは、どこへ、いったの

あの、あたたかい、ひかりは

*** **

あたたかい……。

なぜ？

どこに、あるの？

いつ、かえるの？

あの、輝きに

「ラヴェンナ」

目をあけた刹那に、真冬の夜空のような瞳とかち合った。

「陛下」

「探した。なぜ、あのような場所に」
白い息が舞った。

間近にある熱を急に感じ、思わず身じろぎした。知らぬ間に、外套でくるまれていた身体に気づいた。

「……申し訳ありません。すぐ、戻るつもりで……いつの間にか、

うたた寝を」

「いつの間にかでは、ないっ！」

深閑な夜の冷気を、怒声が破った。

「かような時候に。なにを考えている」

見上げた瞳は、厳冬の星影のように、冴え冴えと光る。

「大事に至れば、いかがする」

「……大事？ 大事とは、なんですか」

懷に、手をあてる。かたく手を、とじる。

「なぜ、いつもそのように 諦めている」

「諦めている？ わたしが？」

この声は、なぜ、こんなに響くのだろう。
冷たく、胸に刺さるように。

「諦めているだろう。 なぜ、キールドがその笛をわたしに
託したと思う」

「 つ！ あなたは、なぜ……っ。 なぜなので
す」

なぜ、わたしに、構うの。

なぜ、わたしに、触れるの。

「わたしには、いつすることですか ……」

乾く

ひどく

一体、なにが

と
ぼくには、それしか赦されない。いや、それすらも、きつ

後悔を置き去りにしてなお、償いすら、赦されることはか
なわず

声が木霊する。

迷い込んだ落葉が木霊する。

「わたしはなにも、望んでいません……っ」
懐の笛を、握りしめる。

音は、とおい。

失くしてしまった。

春の瞳が、伏せられた、あのときに。

十一・

その季節を　そのめぐりを　君はどうか

*** ** *

背筋に寒さを覚えて、震えた。
せりあがってくる不快感に、口をおおった。

「　お方様？　いかがされました？」
身体が傾いだせいで、手にしていた縫いかけの刺繍が床に落ちた。
侍女が駆け寄る音がきこえた。

　ここしばらくは、治まっていたというのに。
いえ。こちらに来てからは、なにもなかった。

「ただ今、侍医をお呼びして参ります」
侍女の足音が遠ざかっていく。

ふいに。ぐらっ、と。

景色がゆらいで、とうとう床に膝をついた。

気がつかなかった。
手が、腹をかばっていた。

砂だらけの床に。散らばった硝子の破片が、見えたような気がした。

そして 短剣。

そう、短剣を掴もうとした。

そして、それは今も。

硬質な感触を、懷にさぐる。
剣が熱をもつ気がする。

わたしは なにが したいのだろう

音は、とおい。

ならば、おわたのだ。
だから、おわる。

ならば、かえってくる。
なにもかも。

手のひらに、ざらついた感触が伝わる。
砂 ではない。床に落ちた刺繍の、縫いかけの、撫子。

かえつてくる。
失くしたものは、きつと。

*** ** *

「冷え込んで参りましたゆえにございましょう。もうまもなく、雪も降りましょうから」

わたしが横になった寝台の傍らに立つ侍医が、穏やかに言った。

「大事はございませぬ。ですが、お身体を決して冷やされてはなりません」

なだめるように、諭すようにするその声は、横になったわたしの身体にゆっくりと浸透する。

顔が、ゆがむ。

胸が、くるしい。

「なにとぞ、ご案じ召されませぬように」
また、なだめるように声が降りた。

なんのために、一日と置かず侍医が室に来るのか。

なぜ、心配されるのか。

本当は、もう。

最初から、ずっと。

わかって、いるのに。

*** ** *

……あたたかい。

ゆつくりとすべる熱を、頬に感じた。

「大事ないか」

ぼんやりとした意識のなかで、声が木霊する。

落ち葉を巻きあげた風が、室の窓にあたる。
深閑なかつての国境の森が、ざわめく。

「 もうすぐだ。 もうすぐ…… ……」

あのひとの名をささやく声が、きこえた気がした。

十二・蹟・一（前書き）

蹟・一

（せき・いち）とお読みください。

十二・蹟・一

「この者に、覚えはあるか」

灯火に揺れる影が、音もなく壁に這う。

硬質な声は冷たい壁に翻つてなお、冴え冴えとして響いた。
氷のように、瞳は射る。

「……………」

*** ** *

「その、旗は……………」

固く手に握られた、汚れた長い柄を見つめた。

「この最上の塔のものだ」

ああ。

落ちたのだ。

城は、落ちた。

「……………」

短剣の柄を握りしめた。

ざらついた砂の感触が手のひらに伝う。

その、刹那。

「なにをしているっ！」
「やめてやめてっ」

はなして。
おねがい。

あなたが笛を吹くときは 争乱のとき
ただ鎮魂の音を奏でるために

音が、しないのなら

「音は……」
「ラヴェンナ」
「……っ」

やはり、そうだったの。

この名を呼ぶのが、キールド。あなたでないのなら。

「ラヴェンナ」
突き刺さる。熱く、乾く。
「終らない。まだ、終わらない」

風が
唸るような烈風が、巻く。
砂塵を。衣を。髪を。

風が、弔鐘を鳴らす。

今はない、落ち葉も 手紙も
すべて 浚う。

たすけるから 君を かならず

*** ** *

氷のように、瞳は突き刺さる。

「この者に、覚えはあるか」

「……………」

「ラヴェンナ」

なんて、似た面差し。

どうして、春の瞳ではないの。

「ラヴェンナ。終りだ。今度こそ」

声が、胸に 刺さるのは
氷のように 響くのは

「この、者は……………」

同じに。

失って、しまったから。

このひとも。

「キールドから国を。すべてを」

奪つた者。

十三・蹟・二

泣いていたあの子の頬は、あたたかかった。

『なんと、無茶なことを……』

『確証が欲しかった』

『それにいたしましたも。お方様は、身重でいらっしゃるのですよ』

『……その通りだ。ただ』

『そのような顔を、なさいますな』

『……うしなつたものは、もどつては参りませぬ。陛下』

『キールド様は、いつも。あなた様の、おそばに』

ぼんやりとした霞のなかで、瞳が痛みに伏せられたように見えた。

親愛なる

君の名を書くのは、きつとこれが初めてだろうね。
君とみたあの湖は、いまでもきつと穏やかなのだろう。

親愛なる シュライゼ

君は覚えているだろうか。
初めて会ったときの、ぼくの顔を。いまぼくは、あのときと同じ顔
をしているだろうか。

もうどれほど君の国で、ぼくは君と月日を過ごしただろう。
いや、四年という月日は、そんなに長くはないのかも知れない。
なぜこんなに、やさしく感じるのだろう。君と過ごした日々を。
決して、楽しいものではなかったはずなのに。そしてそれは君も、
同じだったはずだ。

君の国に初めて来たとき、なんて穏やかで平和な国に来たことだ
ろうかと（いや、そんなことはわかっていたはずなのに）、そう、
なんて穏やかな国に来たものかと、ぼくはなかなば君を憎んだ。
君の抱える苦しみをなにも知らぬまま。

もう書くまでも、ないだろうけれど。
ぼくは、古くから争いの絶えない国に生まれた。
ぼくのごく幼い頃を最後に戦争は終わったけれど、城の堅牢な石壁は、
いつも冷たかった。

それから静かに、ただ静かに時は流れていった。

だけどあるとき、その静寂を打ち破る光が生まれたんだ。
ぼくにとつては、それは光だった。

その光を初めてみたとき、ぼくは驚いたんだ。
こんなに無垢で、こんなにかわいいものがあるのだと、そんな歓喜
にあふれた感情を、まだ幼かったけれど、そのとき初めて知った。

もうなんと君に話しただろう。

ぼくは、その光　　いや、ラヴェンナと、ずっと一緒に遊んで育
った。

たしなみとして母から与えられた覚えたての笛を、ぼくはくる日も
吹いて、あの子に聴かせた。

あの子はお姫さまなのに、口を大きく開けて、よく笑う子だった。
それにぼくの吹く笛を、目を輝かせて聴いてくれていた。

あの子の父君と母君　　いまはもう亡くなられた国王陛下と王妃
陛下は、あの姫を殊更に大切にされていた。

ぼくの母と王妃陛下はとても親しくて、母はよく王妃陛下を訪ねて
いた。

あの子が生まれてからも、それは変わることなく。

そうして出会ったあの子は、ぼくにとってもなついてくれた。

春に、暁を。

夏に、木漏れ日を。

秋に、落陽を。

冬に、星影をみつめながら、そのめぐりを、ともに過ごした。

いまでも、瞳をとじると浮かんでくるよ。

あの子の、輝くような笑顔が。

ぼくに笛をせがんだ、あの無垢な瞳が。

あの、光あふれる季節が。

その季節のなかでぼくはいつしか、願っていた。

あの子がずっと笑っていられるような、争いのない穏やかな国になるようにと。

そして望んだ。あの子の永久^{とわ}の笑顔を。

あの子はね、撫子の花がとても好きだったんだ。

刺繍にして、髪を結う飾りにしていたくらいに。

ぼくがそれを褒めると、とても嬉しそうにしてくれた。

きっと、あれが最後だ。

あの子が笑ったのは、あれが最後だ。

そのすぐあとに、ぼくらが過ごした城は、血に濡れた。

狂気の血に染まった。君も知っているように。一度目の、政変が起こった。

いまはもう、あの子と遊んだ庭園は枯れた。

あの子は、いまもまだ泣いている。あのとくと、同じに。

けれど。けれどシュライゼ。

あの子の頬は、あたたかかった。

泣いていたあの子の頬は、あたたかかった。

変わらず。あの子はなにも変わらず。

シュライゼ

どうかぼくの願いをきいてくれないか

十四・蹟・三（前書き）

一部、『十』の冒頭に対応しています。

十四・蹟・三

君が言った言葉を、こんなかたちで君に返さなければならぬなんて。

ぼくは、なんと慮外なのだろう。なんと傲慢なのだろう。

*** ** *

深い茜色が湖面にきらめきをまぶしている。

それは空をもうひとつ見つめているようだ。

青年はひとり湖畔で、笛を吹いていた。

「なぜいつもこの場所で笛を奏でる」

今しがた言い争った声の主に、振り返らずに青年は答えた。

「あの子に、届くように。いいや、届いてほしくはないかも知れない」

「……なぜ」

「ぼくが鎮魂の笛しか吹かないことを、あの子は知っているから。ぼくの笛の音が聴こえることを、きつと恐れている」

青年は笛に目を落とした。

「……さつきは、済まなかった。シュライゼ」

「いや。気にしていない」

「こんな穏やかな国に、争いがあるなんて。幼い頃から、ずっとこの国は平和なのだと思っていた」

「穏やかであるのは、景色だけだ。人の心は、荒れる」

「ぼくはなにも知らなかった。君は、手にしたかったんだね。争いのない国を」

「そうだ。だが。わからない、未だに。正しかったのか。もう、五

年も前の話なのに」

「ぼくがここに逃れて来て、もう四年だ。ここに来なければ、ぼくはこんなにも平静では暮らせなかった」

青年は、穏やかさを慎ましく湛^{たた}える湖に目を戻した。

「ぼくは、君のなにを見てきたのだろうか。こんなにも、ともにいて。父のことにもわからなかった。政変を起こすほど、あの国がほしかったなど」

「近くにいても、わからないことばかりだ。わたしの父も母も兄弟も、心は通わない」

「……生きて、いるのに」

「そうだ。心があれば通わなくて、ともに暮らす意味はない」

「君は、排除しなければならなかった。腐敗を」

「あれ以上争って、戦いにでもなれば。そのように無益なことはい」

「だから、家族を、臣を追放した」

「……人を殺さずとも、人の心は死ぬ。人が生きずとも、人は心に生きる」

「……シュライゼ」

湖面に風が吹き抜ける。

青年は湖をひたと見つめる。

濃い茜色が、青年の瞳を染める。

「君は、正しい」

青年は湖を見つめ続ける。

「シュライゼ」

彼は手の内の笛を、握りしめる。

「ぼくはあの地にかえるよ。この音を、終わらせるために」

風が、青年の髪をなでる。

「あの子はきつと、ずっとあの日から恐れていただろう」

「恐れている、というのは？」

「鎮魂の音が聴こえること。鎮魂の音が聴こえないこと」

青年はふたたび笛を構えた。

音は、湖面を渡り、風に乗り、森を伝う。

茜色の湖水をすべる。

湖面に落した葉陰がゆれる。

入り日は濃く、濃く、落葉を染める。

けれど湖水はきらめく。

澄んだ音を、光とするように。

湖水の茜が、一層のかがやきを帯びる。

光が、笛を照らす。

音が、落日に染まる。

落日に、音がつつまれる。

青年は、目を、閉じる。

*** ** *

済まない。シュライゼ。

いまばくは、どんな顔をしているだろう。

君の国に来たときとは、違う顔をしているだろうか。

また恐れを抱き、憎しみを抱いているだろうか。だけど。ただひと

つ、この胸にあるものを、叶える。

いまはただもう、そのことしかない。

ずっと、忘れられない。君の、かなしみに満ちた姿を。

ずっと忘れられないのに、わかっているのに、ぼくは、君に願ってしまう。

どうか叶えてほしい。君が望んだ国があるように。ぼくが、またひとつ君の失うものになるとしても。争いが、いつまでも果てないのなら。

父があの子を苦しめるなら。

あの子を救う道は閉ざされてしまった。

祖国の再建を誓った仲間を喪ってしまった。

この地に戻ってから三年の月日は、水泡と帰した。

君に頼むしかないんだ。どうかもう。終わりにしてほしい。君が、終らせてほしい。

『人が生きずとも、人は心に生きる』

君のこの言葉を君に返すぼくは、赦されるべきではない。

シュライゼ、ぼくはあの子に、なにも伝えていない。あの日からずっと。

だから笛にこめる。

笛をあの子に渡してほしい。

託す笛は、君の来訪を、待つ。

これは成し遂げられなければならない。

ぼくは父を討つ。

城を崩してくれ。

あの子を頼む。

十五・蹟・四

「あの地に、お帰りになるのですか」

壮齡を幾分過ぎた侍医は、そう青年に訊いた。

「もともと逃げられるものではなかった。戻って、祖国を再建する。どれほどかろうとも」

侍医は、青年の持つ笛を見つめて言った。

「あの国で、あなた様と王女殿下に直接お目見えしたことはございませんが、あなた様がお吹きになる笛の音は、いつも聴こえてございました」

お優しい、慈しみあふれる音色でございました。と懐かしむように目を細めた。

青年は視線を笛に落とした。

「ぼくは優しさも慈しみも持っていない。ただ浅はかで、傲慢で、それが比べようもないくらいに愚かだ」

「いいえ。わたしはそうは思いません。あなたはお優しい。あなたが、王女殿下をどれほど思いでいらっしゃるか。これまであなたを拝見していてわからないはずがございません」

青年は笛を硬く握った。

ラヴェンナ。君にこの思いを伝えることができない。心がこわれるほどの喪失を負わせてしまうかも知れないから。

けれど、ぼくの望みは君だ。君だけだ。

君が生きてくれるなら。どんな慮外にもぼくはなろう。

「キールド様。どのような償いも後悔も、誰もが負っているのです」

その言葉に、いつの日も変わることのなかった少女の笑顔が浮かぶ。

いつかに、少女に綴った手紙。
彼女は、覚えているだろうか。

暁も木漏れ日も落陽も星影も
めぐる光はいつも
あの子とともに。

十六・蹟・五（前書き）

『九』と『十』に対応しています。

十六・蹟・五

少女は泣き濡れた顔でこちらを向いた。
少女の顔を見た少年は庭園に立ち尽くす。

今しがた起きた惨劇を信じられる術を、少年は探したかった。

景色のすべては、色褪せた。崩れ落ちていた。

「ラヴェンナ、ぼくはもう吹かないよ。かなしみの笛しか、吹かない」

つい数瞬前までであった庭園の輝きは、そこにはなかった。

「鎮魂の笛を、奏でよう。祖国を、取り戻すまでは」

思い出は、今、この時から凍る。

かなしみで、全身が冷たくなる。

「……とりもどす……？」

「ぼくには、それしか赦されない。いや、それすらもきつと」

償うことなど、できようはずがない。この少女の失ったものをふたたび返す以外では。

「ラヴェンナ。ぼくは、ゆるさない。君からすべてをうばったぼくの、父を」

その意味を瞬時に悟った少女は、首をふった。

「わからない。キールド、わからない。どうして？」

ゆるる少女の髪に、幾日か前にあった撫子なでしこを刺繍したリボンはなかった。

刺繍が得手ではなかった少女が、きつと懸命に作ったであろうもの。遊学すると話したことに落ち込んだ少女を元気づけようと褒めたりボンだった。

あの撫子の飾りは　そう訊こうとして、やめた。失くしたのかも知れない。もう、これ以上失くしたものの在り処あじかを問うてどうするのだろう。

「ラヴェンナ。泣かないで」

少年は少女の頬に手を滑らせた。

少女の頬は、あたたかかった。

どれほど月日がかかっても、必ずきみをたすける。
たとえ、父を弑しいすることになっても。

娘は背を向けて歩廊に立ち尽くしていた。

青年はかつて祖国と呼んだ城の、朽ちた庭園を見つめた。
迷乱する落ち葉が青年の足元を流れた。落ち葉を眺めて遊んだ在りし日の少年だった頃の面影を乞うように。二人の思い出を悼むように。

思い出が青年の胸に飛来する。朽ちた庭園にあってなお、落ち葉は舞う。思い出が木霊する。

青年は硬く目を閉じた。

娘の、名を呼ぶ。

「ラヴェンナ」

娘は驚きに、立ち尽くす。

「どうして」

「戻ってきたんだ。君を、たすけるために」

娘は呆然と青年に告げた。

「わたし、手紙を、なくしてしまった」

「持っていてくれたのか」

いつかに送った一通の手紙。

きつと大切に持っていてくれたのだろう。

ならばまた、大切なものをひとつ失わせてしまった。

青年は痛みに沈んだ瞳で娘を見つめた。

娘の頬に、手を滑らせた。

「ラヴェンナ。泣かないで」

思い出は、あの日から凍った。

けれど娘の頬は、あたたかかった。泣き濡れていたあの日と、変わらず。いつの日も、変わらず。

取り戻す。必ず。この光を。

青年は、娘の名を呼ぶ。

「ラヴェンナ」

春の暁

夏の木漏れ日

秋の落陽

冬の星影

そのめぐりを その季節を 君はどうか

「ラヴェンナ」

光は

「すまない、ぼくはまだ。かなしみの笛しか、吹けない」

永遠に

「ラヴェンナ、たすけるから。君を、かならず」

君のなかに

*** **

「一度ならず、二度までも。こんなことにつ……」

笛を握りしめる。近しい者をまた、失ってしまった。

わずかにあつた希望の道すら、消し去られた。

弔いの鐘を、鳴らす。

すべての嘆きをなでるように。

惨禍を濯^{あら}い流すように。

取り戻すのだ。ただひとつ残されたあの光を。たすけるのだ、必ず。

道はもう、ひとつしかない。

あの子の望むことはこれからはすべて、叶えよう。

その先はもう、叶えることはできないから。

彼女がいる最上の塔を見据える。

笛を構える。口づけるように。

彼女が泣き濡れた日から、ついにななしみの笛しか吹けなかった。在りし日の輝きに、かえることはなかった。

『わたし、手紙を、なくしてしまった』

いつかに送った一通の手紙。

また、大切なものをひとつ失わせてしまった。

自分が、これから行うことは、どれほどの喪失となるのだろう。
彼にとって。彼女にとって。

彼女が恐れていることを、している。

彼女が恐れていることを、する。

それは笛の音が、聴こえること。聴こえないこと。

それは争乱の音がするとき。争乱の音が永久とわにやむとき。

それは自らの心が死ぬこと。人が、心に生きること。

それは会えること。それは、逢えなくなること。

「 済まない」

あの手紙が、もうないのなら。

笛に、こめよう。

この思いを。

そして託そう。

彼女が、この思いに気づくことがなくてもいい。

気づくときは、こわれるときだから。

気づいてくれればいい。

気づくときは、手にするときだから。

けれどきつと、気づいてほしい。

だって君は 光だから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8061v/>

落日の音

2011年11月20日14時02分発行